

体験をカに パート2

②

莖葉(地上)と根(地下) バランスの良い健苗を

指導部顧問 松浦 一 宇

今年の冬は、西日本に度々大雪を降らせ、雪国といわれている庄内・由利地域に降雪が少ない特異な気象であった。
いよいよ始まるイネづくり期間(4~9月)に「異常気象にはならないで」と「天候に恵まれる」ことを祈るばかりである。
昔から「苗半作七分作」とも言われ、苗の良し悪しが移植後の生育や品質・収量に大きく影響する例えとして使われてきた。
気象条件等が厳しいほどに「抵抗力に勝る」健苗育成が求められる。



写真① 箱並べ5日後不完全葉展開時の生育状況



写真② 不完全葉展開時、すでに根が床土を突き破る生育

莖葉と根の

バランスの良い苗を

「健苗」と一口によく使われるが漠然としていて捉えにくいので定義づけるとすれば、次に挙げる5点に要約されると思っている。
(イ) ばい菌等の病虫害に侵されていない。
(ロ) 莖葉は短めで、太くて硬く、すくなく立っている。
(ハ) 葉色が濃く、箱内に密にトグロを巻く(マット型成) 包土に優れバラけにくい。
(ニ) 理想的な苗を作るための第一歩として、莖葉(地上部)と根(地下部)のバランスを良くする育苗管理に心がけることが重要である。

写真①は出芽無加温・ハウス平床育苗で、播種後、ハウスに箱並べしてから5日目頃で、不完全葉が出揃ったが、まだマルチを除去する(1葉展開期) までには至らない。

また、ハウスの被覆ビニールを冬期間取り除いている場合は、雪解け後早めに張り掛けたり、遮光資材(ダイオシート)等は箱並べ直前まで掛けず、ハウス内温度を高めるような心がけたい。

写真は、地上部(マルチ内側)と地下部(箱内床土)の温度差をなるべく少なくして、適温を守ることにバランスの取れた苗づくりの第一歩であり健苗に繋げるための第一関門である。

つけない時期の状況を写したものである。写真②は①と同じものの根の状況を写したものである。地上部と地下部が同じ位に生長している証拠であり重要なことである。

無加温出芽だと、特に、天気が良い日はハウス内温度は上昇しやすいが床土の地温上昇はややゆっくりと上昇する傾向にあるので、箱並べ直後から5日間のハウス内温度調節が重要であると思っている。

写真は、地上部(マルチ内側)と地下部(箱内床土)の温度差をなるべく少なくして、適温を守ることにバランスの取れた苗づくりの第一歩であり健苗に繋げるための第一関門である。

また、ハウスの被覆ビニールを冬期間取り除いている場合は、雪解け後早めに張り掛けたり、遮光資材(ダイオシート)等は箱並べ直前まで掛けず、ハウス内温度を高めるような心がけたい。

置床は均平に

ハウス内置床を均平にする重要性は分かっているが平らになっていない為に苗の不揃いに繋がっているものが散見される。

誰でも簡単に平らに出来る手段(作業工程)の一つを参考までに述べる。

①トラクター等で耕起②枕地や旋回時の轍等をおおまかに均らす③トラクターやキャリア等で踏み固める④アルミブリッジ等に紐やロープを付け数回引き回して均



写真③ 置床の固さ、コンパネ(半割)を敷いただけで離れ出来ない

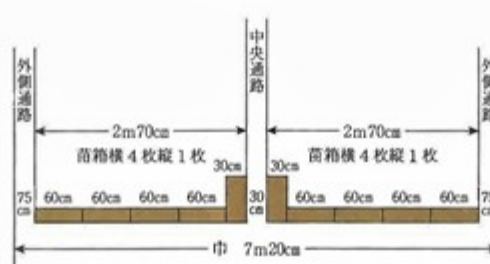


図1. 巾4間ハウスの箱並べ例(真上からの図) (松浦)

ヘリ苗も中央の

苗も揃える

箱苗一枚一枚全部が均一に生育が良く揃っていることが理想的である。特に、無加温出芽では、ハウスや畝のヘリ等の生育が遅れがちになり易いものである。

対策として、マルチをヘリ周りだけ二重にしたり、被覆ビニールの裾を隙間なくキッチリと押える。また、出来る限り外側に余裕を開ける。図1は巾4間(7m20cm)ハウスでの苗箱配列事例である。中央の通路は少々狭くとも歩く



写真④ 遮光資材(ダイオシート)の下で天窓を開けて適温管理に努めているところ

のに支障がなければよしとしているところである。

天窓や妻窓を利用 理想的な温度管理で

箱並べ直後の適温管理が一番重要だと言われているが、遮光資材(ダイオシート)に頼る以外は少々の高温になっても障害を受けなければよいといった声もある。

写真④は遮光資材(ダイオシート)だけでは適温を守ることが出来ないためにダイオシートの下にある天窓を開けて温度調節している様子である。

妻窓や風下のサイドを開閉したり「適温管理」にするための工夫も大切であり、高温障害にならないければよいといった安易な気持ちでの、健苗づくりは無理と言わざるを得ない。

尚、育苗期中の生育に合わせた適温等については本誌3月号26~27ページの育苗管理ごよみを参照願う。